下　　栗本 薫

文藝春秋

■著者略歴

昭和28年2月13日、東京に生れる。栗本薫のほかに、中島梓のペンネームも持つ。早稲田大学文学部文芸科卒業。
「文学の輪郭」（筆名・中島梓）で第20回群像新人文学賞受賞（評論部門）。
「ぼくらの時代」（筆名・栗本薫）で第24回江戸川乱歩賞受賞。
「弦の聖域」（筆名・栗本薫）で第2回吉川英治文学新人賞受賞。

© Kaoru Kurimoto, 1981

翼あるもの　下
殺意

定価　900円

昭和五十六年九月二十五日　第一刷

著者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一
印刷　凸版印刷
製本所　矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《目次》

Ⅰ

グッドナイト・ウィーン　7

As Tears Go By　25

九月の雨　――セプテンバー・レイン　39

Because　53

Ⅱ

身も心も　73

Ⅲ

それはスポット・ライトではない　139

ためらいもなく時は過ぎ　153

フールオンザヒル　191

あとがき　205

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

翼あるもの　下

殺意

装幀　竹宮恵子

A・D　坂田政則

I

グッドナイト・ウィーン

それを迎える瞬間に、また透はかれの名を口走っていたのであるらしかった。

慌しく身じまいを終える男の目に白けた光が漂っているようだった。透は気にしなかった。どうせ一見の客だった。

手の中に押しこまれた幾枚かの札をポケットにおとしこみ、客の出ていったあとの洗面所の鏡の前で念入りに姿かたちをととのえた。荒々しく幾度もうがいをしたが、口の中にも、からだのなかにものこっている男の匂いは、どこかにいつまでもまつわりついているように思えた。鏡をのぞきこむ。うつっている顔は紫色の隈にふちどられた、美しい、しかしどこかに病的な弱々しさと怒りを湛えたほっそりした女顔だった。

細い首にマフラーを巻きつける。栗色の長めの髪がやわらかく、その上に垂れかかる。華奢な指で前髪をかきあげてみた。男や、金のある年をとった女の肩にまつわりつく以外に能のない指だった。拗ねたような瞳と赤い唇が鏡の中からのぞきかえした。

コールテンのジーンズと黒いダブルのコート。茶色のブーツはヒールが高い。コートの衿をたて、肩をすぼめて旅館を出る。まっすぐに、六本木のクラブへ行く。

タクシーを交叉点でのりすてた。流行のファッションに身を飾った若い男女がたむろしている。サングラスを出してかけ、コートの衿と黒いマフラーに顎をますますうずめた。それでも、その声はきこえてきた。

(ねえ——あの人)

(どっかで見たことない?)

(知らねえな。モデルかなんかだろ)

(——ああ。思い出した。見て、見て、トミーよ、あれ)

(トミー?)

(森田透——知らないの。ほら、さ、もとレックスの)

(あ——ジョニーの、か)

(それよ。「ザ・レックス」のサイド・ギターだった、トミーよ)

かれは慌しく地下のクラブにとびこんでゆく。背なかで、ささやきというには無遠慮な声は、いつも必ずそうなるようにつづいていくだろう。

(あいつ独立したんだろ。何やってんだいこのごろ、さっぱりきかねえけど)

(二、三枚演歌のレコード出したけどさっぱり当たんなかったみたいね。きれいな顔、してたんだけどさ……ジョニーの陰になっちゃってたもんね)

(相手が今西良じゃな——運のわるい奴だよな)

(そうよねえ、少しばかしきれいだって、相手がジョニーじゃさ……)

(おとなしく、レックスのギターひいてりゃよかったのにな。張りあおうなんて気、おこさずにさ)

(ジョニーって最高。こんどの新曲のコスチューム見た?凄いわよォ、アクションがね……)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

かれ、かれ、かれ。ジョニー、こと、今西良、二十四歳、歌手。
（かれ）
「濃くしてくれよ」
透はバーテンに云った。
「トリプルで」
「ああ」
暗いカウンターに座ってグラスをはずし、コートを羽織ったまま、酒を口にもってゆく指がふるえて、氷がかちかちいった。
「寒いんですか？　スチーム、つよくしましょうか」
「いいよ――それよりボトルおいといてよ」
店はほどよく混み、かれに注意をむけるものはいなかった。かれは前髪をふりやり、「ボニータ」をつまみ出した。くそ、手がふるえる。何だっていうんだろう。
「痩せたんじゃありませんか」
「もとからさ」
「何も食わないんでしょう」
「食ってるよ」
純正の蛋白質をね。胸の中でつけくわえると、口いっぱいに熱い青くさいその匂いがひろがってきて、かれは吐きそうになった。
「もっとましな曲ないの」
「リクエストなんですよ」
客たちの喧騒とタバコの煙。かれはまたボトルからグラスに注ぎ入れた。
「あまり急いで飲むとアル中起こすよ」
「もう、なってるってよ」
「急性でさ」
細巻の葉巻タバコを、二、三服しただけでかれは灰皿に押しつけてねじった。
「この曲、やめてくれよ」
「嫌いですか。いい曲じゃないですか。演歌もいいですよ」
「嫌いだよ、こんなの」
「リクエストなんですよ」
「オレもリクエストするよ」
ふるえる手で札をつかみ出した。こころえたバーテンは肩をすくめた。
「何にしますか」
何でもいい、演歌でなけりゃ。
「危険な関係」
もうひとつ肩をすくめて、プレイヤーに手をのばすバーテンのうしろ姿が、あんたも変ってるね、と云っている。わざわざあんたを打ち砕いたライヴァルの大ヒット曲をきいちゃ、イヤな気分になろうってもんだ。ま、好きずきだけどさ。プレイヤーにLPがのせかえられ、毎日誰でも最低二回は耳にしている筈のヒット曲の派手なイントロが流れ出す。有線から、パチンコ屋の前から、TVの歌番から、

きこえてこない日はありゃしない。
透の唇がたどたどしく歌詞をなぞり、かれはまたあわただしくバーボンを飲み下した。
（ピッチが、早すぎるね）
カウンターの、反対側の隅だった。
客たちはみんな何人連れかで陽気に、それともしんみりやっている仲間たちばかりだ。ひとりで、カウンターで、恰好をつけて肘をついているのは、透のほかにはそいつだけだった。
大きな男。がぼがぼの、アーミー・ジャケット。鼻下髭、すかしたレイ・バン。芸術祭賞をもらった「海の挽歌」の画面を思い出すまでもなかった。巽竜二なのだ。
透は目をそらし、タバコをつまんだ。六本木で有名人などめずらしくもない。転落した、それともなりそこねたスターがめずらしくもないようにだ。巽竜二がまた透の白い顔に目をあてた。
ジョニー&ザ・レッグスのナンバーワン・ヒット曲は、終わりかけていた。あの奇蹟の声がほそくかすれて消えてゆく。自由自在に声をかすれさせ、たゆたわせ、張ることができるのは、ジョニーの特技といっていい。
（今西良、レコード大賞の最有力候補に！）
新聞の広告欄の、週刊誌の見出しがちらついた。お前はどこまでゆくつもりなんだい、とグラスの中にうかんだ目の大きい、唇のしゃくれた、妖しいほどなまめかしい顔にむかってささやきかけた。
くっきり切れあがった二重瞼、ちょいと先をそりかえらせた鼻、淫蕩なくらい、色っぽい、厚めのしゃくれた唇、弓なりの眉。決して、絵のように端麗な目鼻立ちというのではない。トミーの方が、顔立ちはきれいだ、と誰もが云った。
（だけど……）
そう。誰もが必ず（だけど——）そう、つけくわえる。ふしぎと魅力があるのよ。生きてる人と死んでる人くらい、違うんだな。光ってるんだよ。あいつはまわりをまるで目立たなくしちまうんだ。たまらないのよ。
（顔立ちでいえば、トミーの方がととのってると思うんだけど……）
わかったよ。だけどはもう沢山さ。
「——いいかね、ここ」
ふりむいた透の目に、巽竜二の無表情な顔がうつっていた。のっそりと立って、指に短くなったタバコをはさみ、左手はジャケットのポケット。
「ご勝手に——」
大男の、もとやくざ映画スターは、音もなく隣のスツールに腰をおろす。誰か、見ていただろうか。見ていたっていい。透はボニータをひねりつぶす。
「勿体ない、吸い方をするね」
俳優がスクリーンで見るとおりのぼそぼそした喋り方で

云った。薄色のレイ・バンの奥の、意外にやさしい色の瞳が透をのぞきこんだ。
「何か用」
「あんたの名前、思い出せない」
「森田透」
「森田――？」
わからなきゃ、教えてやるさ。ジューク・ボックスから、けたたましい、十七、八のアイドル歌手のぺちゃんこな声が流れ出した。
「っていうより――トミーっていえば、思い出すだろう。ザ・レックスを追ん出て、ソロ・シンガーになりそこなった、サイド・ギターの」
そしてたぶん、ひもにも、男娼にさえもなりそこなった。ジゴロにだって素質はいるのだ。
「――ああ」
思い出したようでもなく巽竜二は呟いた。透の頭を、脈絡もなく、どれをとっても二万枚以上売れることのなかったレコードのジャケットがよこぎる。「夕陽のブルース」――「別れるときも」――「霧の中の女」――「愛しすぎたのね」。
「用がないんなら……」
男は黙って、動じたけしきもなく酒を咽喉に放りこんでいる。足を組みかえるとき、ワーク・ブーツの壊れたチャックが、カチャカチャ音をたてた。
バーテンは氷を割りにひっこんだ。ふたりはむっつりして酒を飲んだ。どうしてマフラーもコートもとらないのか、ぐらい、きいたってよさそうなものだ。
それとも、「俺を知ってるかね」か。何だっていい。
（誰だって、知ってる筈だと、思ってやがるのか）
髭の下の唇を、荒れた舌がなめ、やけどするまでくわえていたフィルターなしのタバコを太い指がひねり消した。革のような頬が、六本木の洒落たクラブに奇妙に似つかわしくない。彼は、植えかえられたサボテンのように、不幸そうだ。
ジョニー、と透は思った。お前このごろどこで飲んでるんだい。
ジョニーのいるところならどこでも、そこはジョニーの神殿になった。ひとびとはただジョニーを見、その電流のようにまきちらしているなまめかしいあどけなさ、仔豹のような危険な無邪気さを夢中でむさぼった。かれのまわりにはいつも華やかな笑い声がたった。
「ここは、おちつかないな」
巽竜二が突然云ったので、透はびくっとした。
「俺――俺の巣は、ゴールデン街なんだ」
「だろうね」
髭と笑い皺のせいで老けて見えるけれども、この男は案外に若いのかもしれない、と思いながら、答えてやる。たしかにあんたにはハモニカ横丁やゴールデン街が似合うだ

ろう。ただのやくざ俳優から、一躍、カウンターカルチュアの寵児にのしあがった問題作「海の挽歌」の大野梓監督が彼を見染めたのも、酒びたりのゴールデン街の夜明けがたの路上だった、という伝説だ。

それで？　とたずねるように透は細い眉をあげてみせた。

「ここはおちつかん」

男は、もう一度くりかえした。

「行こう」

冗談じゃないぜ。あんたと一緒に行くなんて云った覚えないよ。第一あんた何のつもりなの。オレのこと知ってるっていうのかい――だけど、どっちみちお断わりだ。さっきやっと、済ませて逃げてきたばかりなんだ。オレはその晩の飲みしろ以上に稼ぐつもりはないからね――第一からだが保ちゃしないよ。

しかしそのどれをもかれは口にしなかった。ひとつには、巽竜二は不幸で――ひどく、戸惑った子供のような目で透を見ていたし、そしてまさにそのとき、ジューク・ボックスから二度めの「危険な関係」が流れてきたからだ。

「行こう」

巽竜二はむっつりとくりかえした。彼が勘定を済ませるあいだ、透はコートのポケットの札を指さきでさわりながら自動ドアの前に立っていた。

「ジョニー？」

巽竜二が、ききかえした。ゴールデン街の片隅の畳三枚しけばいっぱいになってしまいそうなバーだ。

「――ああ。知ってる」

知ってるだろう、あんたでさえも。透の胸のなかの熱い空洞は、良の名前、表情、（かれ）でいっぱいになってしまっている。（かれ）の名を口にせずにはいられなかった。それはちょうど、いたむ歯にたえず子供が舌をやってみずにはいられないようにだ。

「――考えてみたこともなかったが」

いぶかしそうでもなく、彼は云った。

「あの――女みたいにきれいな顔をしてる……誰だったか、歌手と結婚するとかしないとか云ってた」

「吾妻ルミだろう」

「よく、知らんがね」

「あんたは、何きいても、よく知らんばっかりだね」

意地わるそうにうすい唇をゆがめて、透は云った。

「いまどき、ジョニーも知らんで、俳優がきいて呆れるよ」

「その、ジョニーが……」

甘ったるい愛称を、云いにくそうに巽は発音した。

「――そのジョニーのおかげで、オレはレックスを追ん出て、ソロ・デビューも当たんなくて、クラブ・シンガーにずるずる、おっこちた、ってわけ」

「わるいことを――きいたかね」

「別にわるいこた、ないさ。誰だって知ってることなんだ

から」
　あんた以外はね、とつけくわえた。小さなバーをはしごして、注ぎこんだ酒がからだに芯棒を入れてくれたように、真白な頬に血の気がさし、饒舌になっていた。
「俺は、いろいろあったから――」
　世の中の事情にうとくなっちまってね、と、巽はひとことずつ、区切りながら、重たげに喋る。
「いろいろあったのは、お互い様さ」
　なぜ、こんなところで、こんな話など、知りあいでもない俳優相手にしているのだろう、と突然思った。しかもジョニーのことなどを――一番、ふれたくないこと、以前には寝たグルーピーの小娘が、ひとこと「ジョニー」と口走った、というので、殴りとばして目を腫れあがらさせてひと晩豚箱のご厄介になりさえしたのだ。
　小さな箱みたいなバーは真暗で、うすあかりに、壁を埋めつくした落書きをかくす新劇公演のポスターが見えた。顔色のわるいやせこけたママは話のあいまにザルに盛って出したピーナッツの殻を割っては口に放りこんでいた。
「食う?」
　巽がピーナッツを指先でくるみみたいにすりあわせながら云う。考えただけで胸が焼けた。
「要らないよ」
「あんたは、痩せてるね」
「……」
「――何か、食わなくちゃ」
「……」
「ラーメンでも、食いにいこうか」
「いいよ。それより――」
　それよりジョニーだけど……かれは、何と云おうとしていたのだろう。
　巽がいぶかしそうに見る。ジョニー、ジョニー、ジョニー、かれの夜はジョニーで埋まっていた。
「あんたは、変わってるね」
「正気でいるのが、イヤなだけさ」
「あんたは、幾つだ」
「二十五」
　良よりひとつ上だった。良よりひとつ上、良より二センチ高く、ジョニーより髪が少し短く――すべてに、(かれ)は存在していた。(かれ)の不在でさえ、(かれ)でないすべての人の実在より重かった。
「若いね」
「……」
「そんなに痩せてちゃ、ダメだな」
「何が。とっくに、ダメになってるよ」
「もっと肉をつければ、あんた、凄いきれいだろうにさ」
　竜さんがこんなに喋るのは、珍しいわね、と、髪をばっさり断髪に揃えたバーのママがつやのない声で笑った。インタヴューアー泣かせ、なのだ、と云う。

「——何ていうのかね」
放っとけないような気がしたのだ、という意味のことばを照れくさげに口の中で呟いて、巽は透を見た。
「あんた——薬、やってるのと違うか」
「薬？」
透は首をふった。自分が一年ごとに、すさんだ、病的な腐臭を身にまといつけていることは、知っていた。オレの旅はバッド・トリップにしかならないだろう、と思う。もっとつよい麻薬がかれの内側を食い荒しているのだ。
「そうか」
なら、いい、と巽は云った。あれは、よしとけよ、とも口の中で云った。
「俺も昔、それで苦労したから」
「因縁話かい。そんなの、ご免だな」
当然、巽竜二はかれの本業を知っての上で、そちらに用があったのだろう、と頭から疑わずに、ついてきたのだ。
放っておけない、と云われても、感動して泣きやしないよ、と胸の中で悪態をついた。ジョニーなら信じただろう。
(かれ)はいつだって、ひとの特別な好意が降るようにそそがれることに狎れているのだ。
(かれが窮地に立つようなことがあったら、僕は何をおいても、どこまででも、かれを救いにかけつける)
そう、云った、TVの敏腕プロデューサー。
(生命のあるかぎり、今西良の一部としてやってゆきたい)
レコード・ジャケットに、そう書いた、レックスのリーダー——堀内弘。
(これで十回、来ました。一ケ月、毎日来るつもりです)
一ケ月のロング・リサイタルの切符を買いに並んだ少女へのインタヴュー。
オレはジョニーじゃない、と激しく透は思う。オレは信じない。(かれ)にはいつだって何かがおこった。それがオレと(かれ)の違い、それも決定的な違いだった。
つきはなされて、男は黙ってバーボンを咽喉に流しこんでいる。この男は、実にうまくなさそうに、水でも飲むように氷も入れない酒を飲む。
「どうするの、これから」
突然、透はきいた。ミルクを飲むように、バーボンを啜りながら、驚いたように巽竜二はかれをふりかえった。彼にはまったく、先の思いは遠いらしかった。

「——始発までにゃ、間があるな」
結局、五軒ばかりを梯子して、さいごの店を追い出されたのが、午前三時、というところだっただろう。
公園の水飲場に口をつけて巽は水を飲んだ。寒い。
「——そこに座るか」
黒いコートの衿をたてて、透はよろめくようにベンチに座り、アーミー・ジャケットの巽のがっしりと厚い肩から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com